

創（総）意工夫で未来へ躍進

対象：新十津川町総進4・5地区（13戸）

1 活動の背景

(1) 課題を整理

表1 新規モデル地区活動合意までの経緯

	懇談会	内容（コロナまっただ中の活動）
令和2年	4月	モデル地域（重点地区）について普及センターから地域の中心人物にご案内。地区で集まる時に話していただく。
	6月	「地域の草刈り」時に、モデル地域について皆様に説明。
	7～8月	経営意向アンケートの依頼・聞き取り・回収。
	11月	第1回 地域の現状把握をすすめ、懇談会でご意見・要望を頂きながら課題を把握。
令和3年	12月	第2回 「地域の課題を解決する方策をみなさんと一緒に考えていきます。」
	1月	第3回 「課題解決に向けた具体的な相談（実証圃等の設置などを含め）を進めていきます」5年間の計画を提案。
	3月	第4回 「令和3年度の年間計画について。令和3年産作物の栽培管理について」



写真1 経営意向アンケートを実施し、地域の現状を把握（令和2年7月）

直播の導入(AE)	園芸品目は情勢や各産地の状況で価格が安定しない印象(CE)	講習会や現地研修会もできるならやってほしい、雨天等集まりやすい時に(EF)
飼料用米には反対(BE)	片手間で作業できない園芸品目は入れづらい(BF)	早生品種が増えてきたのでボットの機械が壊れてもマッパだけでやっていけそう(EF)
米価の低迷に対して続ける価値があるのか分からない(BE)	ミドリカワド(環境測定機器)を導入したが、思ったほどデータは入ってこない(DF)	ほ場の乾田化は年次変動(CE)
移植水稲はつらい(BE)	目標収量はゆめぴりか9俵、ななつばし9.5俵(CE)	雨が多い年や乾いた年でも胴割れが少ない(CE)
春作業の労働軽減(AE)	疎植に挑戦した年あり分けつが十分に取れない年は収量が少なかった(EF)	転作は昔から少ない悪くてもいいから加工用米を作付(EF)
1人でできるような作業体系づくり(BE)	マットでロカールを導入、ビニールが古いことと水温が低く発芽に時間が掛かった。収量はボットと同様(EF)	麦や牧草地の近くはかんがが多い、総進は被害が少ない(CE)
水稲と春小麦の同時作付は難しい(BE)	来年も同じハズ面積でまかなえそう(EF)	規模に対してコストや人員が必要(BE)
本年度は大豆・麦の収量は良かった(AE)	1人で視察に行くのは勇気がいる。普及セターで先進的な取り組みなどを紹介してほしい(EF)	総進は水稲防除はヘリで行っている他地域はドローンを導入(FE)
畑作物の管内平均反収が低い(AE)		
野菜は単価は高いかも知れないが水稲を作った方が楽(CE)		

第1回懇談会でアンケート結果の報告をおこなった



写真2 第2回懇談会（令和2年12月）

重鎮農家より「次に集まったときにもまたこれやるのか？」

図1 第1回懇談会（令和2年11月）で経営意向アンケート結果を受け話題になった項目

(2) 整理出来た背景と課題

親世代のリタイアを見据え、具体的な対策の検討と実践を進めましょう



図2 総進4・5地域の現状・背景と課題

技術講習会を織り交ぜつつ地域の課題を整理

地域の課題について共通認識が醸成できてきた

第3回懇談会（令和3年1月）にて今後5年間の取り組み計画を提案・合意

- (1) 土地利用型作物の安定生産 令和3年～
- (2) 高収益作物の推進 令和3年～
- (3) 担い手への技術伝承と資質向上 令和5年～

計画は懇談会で随時見直します

懇談会案内文書の宛名を後継者並記から後継者宛へと「さりげなく書き換え」、後継者の参加を戸別訪問で促した。

2 活動の経過

令和3年度の活動内容

- (1) 水稲良食味品種の安定生産のための栽培実態調査
- (2) 水稲省力化とハウス有効利用のための密播中苗の試作
- (3) 水稲面積拡大に対応した乾田直播栽培導入農家に向けた技術支援
- (4) 水稲酒米の品質向上のための調査
- (5) ドローンを活用した生育診断に基づく適正管理の推進
- (6) ミニトマトの収量向上と安定のための実態把握と適正管理の推進



ハウスに初めてお邪魔した。ワンダーランドだ。(後継者談)

写真3 同じ重点地区内でのミニトマト視察 (令和3年8月)



ボールの立て方、整枝の方法をアドバイス

写真4 水稲高密度は種を導入、水稲ハウスを転用し園芸作物を新規に導入する相談を受けた。(令和3年6月)

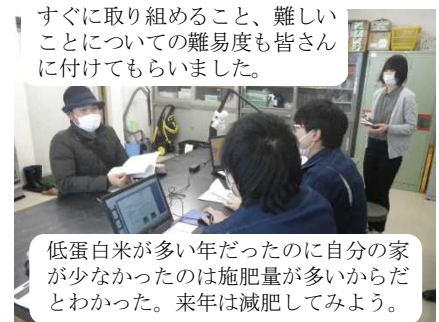


写真5 水田センサーも活用



全自動でムラ直しできるのか?

写真6 センシングデータに基づく可変施肥の試行 (令和3年7月)



すぐに取り組めること、難しいことについての難易度も皆さんに付けてもらいました。

低蛋白米が多い年だったのに自分の家が少なかったのは施肥量が多いからだとわかった。来年は減肥してみよう。

写真7 令和4年の営農に向け個別に改善する事項を相談 (令和4年2月)

3 成果の具体的内容

各農家の課題が見えてきた。農家と一緒に取り組む改善方策を設定できた。

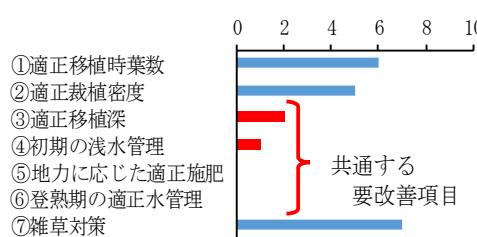


図3 水稲の適正栽培管理の実態(戸)

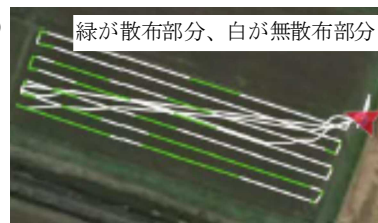


写真8 可変施肥マップによる大豆の自動追肥を初めて実現

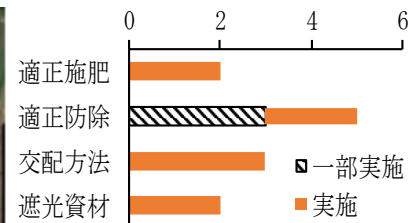


図4 ミニトマトの基本技術の実施状況(戸)

- (1) 高品位米出荷率の高位安定化については、栽培改善目標を8戸が設定した。共通するのは、多肥、深植え、水管理などであった(図3)。
- (2) 畑作物の適正管理については、ドローンを活用した栽培管理を1戸実現できた(写真8)。
- (3) ミニトマト収量の高位安定化については、1戸が新規にミニトマトを導入した(図4)。基本技術実施戸数は1戸であったが、各技術の重要性が認識された。

4 今後の課題と対応

懇談会の開催、戸別対応、展示圃の設置等を通じ次の活動をおこなう。

- (1) 水稲良食味品種の安定生産は、各戸の栽培技術上の課題が明らかになってきたため、取り組みの難易度に応じて、実証圃の設置等に取り組みながら改善を支援する。
- (2) 水稲の密播中苗、乾田直播について、面積が拡大される意向であるので、引き続き技術支援をおこなう。
- (3) 水稲酒米の品質向上のための調査と情報提供を引き続きおこなう。
- (4) ドローンを水稲以外の畑作物の管理に活用するための試行を農家とともにおこなう。
- (5) ミニトマトの管理の適正化を図るとともに、新品種や水稲と競合しない新規品目の導入検討を進める。